

シカゴ万博と鳳凰殿

The World's Columbian Exposition of Chicago 1893 and Ho-O-Den

山田久美子

YAMADA Kumiko

山田久美子
YAMADA Kumiko



狩野友信、岡倉天心、シカゴ、万国博覧会、鳳凰殿

Key words: Kano Tomonobu, Okakura Kakuzo, Chicago, World Exposition, Ho-O-Den

Abstract

KANO SHUNSEN TOMONOBU was born in 1843 as the eldest son of Kano Tosen Nakanobu, eighth head of Hamacho family of the Kano School. Tomonobu was formally appointed as apprentice court painter by the then Shogun Iemochi at the age of 16 and was commissioned to draw paintings to decorate the Shogun's quarters of Edo Castle with his father and other Kano School painters. In addition, Tomonobu was sent to study western painting at Kaiseijo and with Charles Wirgman. Tomonobu was 25 years old at the time of Meiji Restoration, and while many court painters were forced to give up painting, he became instructor of drawing at Kaisei Gakko, later Tokyo University Preparatory School. Here he met Ernest Fenollosa and taught him the fundamentals of Japanese painting. When Tokyo School of Fine Arts was founded in 1889 through the endeavors of Fenollosa and Okakura Kakuzo (Tenshin), Tomonobu was invited to teach Japanese painting. During this period, he painted "The Battle of Heiji" which was exhibited at the World's Columbian Exposition of Chicago in 1893, as well as decorations of the Japanese pavilion Ho-O-Den. This paper seeks to investigate the fate of Ho-O-Den and Tomonobu's works in Chicago.

はじめに

狩野^{しゅんせん}春川^{ともものぶ}友信（1843-1912）は幕府の奥絵師をつとめた浜町狩野家第八代、狩野^{とうせん}董川^{なかのぶ}中信（1811-71）の長男として天保14年築地で生まれた。木挽町画塾で学び、十六歳で將軍家茂により奥絵師見習いに任用されて江戸城の調度品制作などに携わった。そのかたわら幕府が洋学の中心として設置した開成所で川上^{とうがい}冬崖らに、またチャールズ・ワグマンにも入門して洋画を学んだとされる。明治維新後はその素養を見込まれて開成学校、のちに東京大学予備門で医学部や理学部の学生に画学を教えるようになる。この頃、来日して東京大学で社会学を教えていたアーネスト・F・フェノロサ（1853-1908）と出会い、日本画の鑑定法を伝授、狩野宗家当主の狩野^{えいとく}永恵^{たつのぶ}立信や狩野^{ほうがい}芳崖に引き合わせたことで知られる。1889年（明治22）に東京美術学校が開校し絵画教員として雇われたときには四五歳になっていた。二年後に助教授となり1896年（明治29）に退官後は東京盲啞学校などで日本画を教え、徳川慶喜公受爵祝賀会で御前画を披露、狩野会の設立に尽力するなど狩野派の継承に腐心し、ヘレン・ハイドラ来日外国人画家に日本画を教えるなどして普及につとめ、明治末年六九歳で没している。

東京美術学校在勤中の1893年（明治26）、友信はシカゴで開催された万国博覧会に「平治合戦」（図1）を出品している。

平治の乱を題材にした軍記物語『平治物語』をもとに鎌倉時代に描かれた「平治物語絵巻」は合戦絵巻の最高傑作とされるが、その中の「三^{さん}条^{じょう}殿^{でん}夜^よ討^{うち}巻^{まき}」はフェノロサが購入し、のちにボストン美術館の所蔵となった。臨時博覧会事務局の依頼を受けた友信は、「三^{さん}条^{じょう}殿^{でん}夜^よ討^{うち}巻^{まき}」から図様



図1 狩野友信画「平治合戦」東京国立博物館蔵

を借りてはいるが、焼き討ちにあい炎上する後白河上皇の御所三条殿に参入を急ぐ公家たちの姿を狩野派の筆致で描き、博覧会場で展示するため大画面の額装画に仕立てている。「平治合戦」は博覧会閉会後に博覧会事務局から帝国美術館（現東京国立博物館）が引き継いだ友信の代表作である。

友信はまた、シカゴ万博会場に日本政府によって建てられた「鳳凰殿」の中堂、上段の間の小襖に花篋を描いている。閉会後にはシカゴ市に寄贈された鳳凰殿であるが、今はもうない。会場の建物は閉会後に取り壊されたり、あるいはミシガン湖を吹く強い風のため頻繁に起こった火事で消失したりしたという。千年の歴史を誇る宇治平等院鳳凰堂を模して建てられ、友好の象徴として日本文化を紹介する役割を担った鳳凰殿であるが、果たしてどのような運命を辿ったのであろうか。第二次世界大戦中に破壊されたとも聞いたが、詳細は不明である。内部の調度品、友信の襖絵などの行方は？この謎を解くために2007年3月、春まだ浅いシカゴに向かった。

1. 百年後のシカゴ万博

シカゴではオヘア空港からリムジン・バスで市内南部ハイド・パークにあるシカゴ大学に向かい、キャンパス内のクアドラングル・クラブに落ち着いた。シカゴ大学の会員制クラブで、創立後間もない1893年、ちょうど万博開催の年にオープンした由緒ある建物である。ともかく鳳凰殿の建っていた場所を見たいと、2キロほど離れたジャクソン・パークにある科学産業博物館に向かう。全米第二位の入場者数を誇る屈指の博物館であるが、万博会場の美術館（PALACE OF FINE ARTS）を利用して四十年後に開館したもので、中央に丸天井のホールを擁し、前後左右に展示スペースの広がる美術館の原形を生かした構造である。博物館の南側には池が広がり、橋の上からは南側に草の生い茂った^{せきこ}瀉湖（LAGOON）とその中にある森の島（WOODED ISLAND）が見えるのは、万博終了後に出版された会場見取り図（図2）そのままである。

3月の森の島は枯れ草に覆われていた。遊歩道を歩いていくと木戸があり日本風の石灯籠が立っていることから、そこが日本庭園であることがわかる。シカゴは戦後大阪市と姉

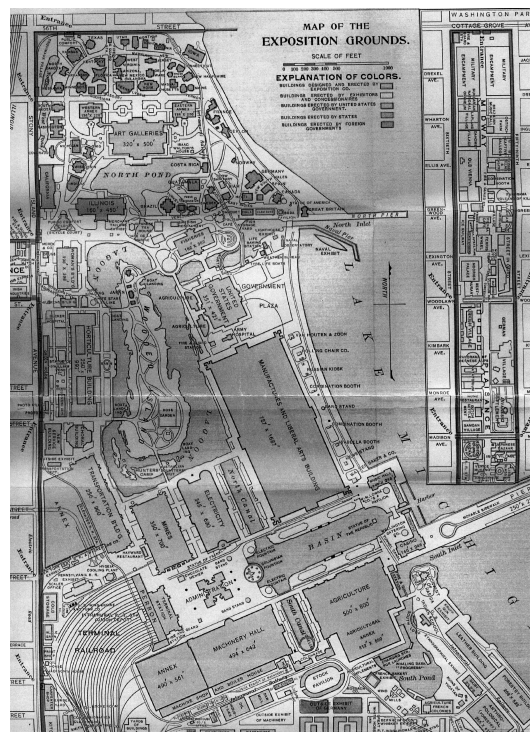


図2 「シカゴ万博会場見取り図」 *A History of the World's Columbian Exposition*

妹都市の提携をし、森の島の日本庭園は1993年に大阪ガーデンと名づけられ再建されたが、鳳凰殿の面影を残すものはない。博物館から離れるにつれ人影もなくなり、ミシガン湖畔のモーターウェイを車が走るほかは人の気配のない寂しいところである。引き返してシカゴ大学に戻ることにした。

シカゴ大学のレゲンスタイン図書館でシカゴを代表する日刊紙シカゴ・デイリー・トリビューンの記事を検索することができた。1946年10月13日付の記事「少年二名ジャクソン・パーク内の日本寺院建築に放火」で鳳凰殿の炎上を写真(図3)入りで報じている。要旨は次のとおりである。

昨夜、十五歳の少年二名がジャクソン・パーク内森の島にある日本庭園の建物に放火、二棟中一棟が焼失し、もう一棟の屋根を焼いた。日本政府が1893年のコロブス世界博覧会のために建てた建築的価値の高い建物であった。少年たちは仲間の通報によりその場で逮捕された。もともと翼を広げた鳳凰を表す三棟続きの建物であったが、今年6月に一棟が火災のため焼失している。いずれも節のない杉材を使って日本から来た七五名の職人の手によって組み立てられ、精巧な木彫に彩色が施されていたものである。万博閉会後は荒れるに任されていたが、1935年に市の土木課によって二万二千ドルをかけて修復された。パール・ハーバーが攻撃されるまでの間、この建物で日本人業者が茶店を営業していた。戦争中は公園事務局によって倉庫として使用されていたが、昨夜炎上した際には無人であった。

記事を読む限りでは反日感情のため焼き討ちにあったというわけではなく、いたずらによる放火のために焼失したようだ。博物館のように美術や建築の専門家が管理する場所ならともかく、公園内に建てられた鳳凰殿を管理するのは難しかったであろう。欧米の大都市の主要な建物は石



図3 「炎上する鳳凰殿」 *Chicago Dairy Tribune*
1946年10月13日付記事より



図4 「瀉湖より北を望む（鳳凰殿裏面）」シカゴ美術館 アーノルド・コレクション蔵

造りであったため、恒久的な木造建築としての鳳凰殿の価値が一般には認識されていなかったのかもしれない。シカゴは強風で知られ、万博開催は1871年の大火による被害からの復興の象徴と捉えられてもいた。万博閉会直後には展示場の多くが火事により焼失している。日本が寄贈した文化財が戦争中の反日感情により焼き討ちにあったのではないかという懸念は、この記事によりほぼ払拭されたが、鳳凰殿の調度品の行方は依然として不明である。

次にシカゴ美術館日本美術部を訪ねた。事前に問い合わせたところによると、ここは充実した日本美術のコレクションで知られるが、日本の万博出品作でシカゴに残っているのは、意外にもシカゴ大学美術館所蔵の薩摩焼の壺および絵画数点、フィールド自然史博物館所蔵のタペストリーなど数点であるという。鳳凰殿の調度品にいたっては、わずかに高村光雲作による鳳凰図欄間の一部がシカゴ美術館に二点、イリノイ大学シカゴ校に二点所蔵されていることが判明した。シカゴ美術館所蔵品は実見することができなかったが、写真を見る限りでは鳳凰の鮮やかな色彩が残っているようである。後にイリノイ大学所蔵の欄間を見に行ったところ、建築学部研究棟の廊下にむき出しで展示されていて、彩色の剥落が顕著であった。この欄間が鳳凰殿中堂上段の間から取り外され、分散して所蔵されるに至った経緯は明らかではない。

シカゴ美術館ではライオン・バーナム図書館で万博の公式写真C・A・アーノルド・コレクションを見ることができた。鳳凰殿が写っているものが数枚あり、会場のパノラマ写真を見ると鳳凰殿三棟の近くにもう一棟日本建築があるようだ。ジョンソンによるとこの建物は日本側事務局が使っていたという。会期中に人気を呼んだという日本の茶店（TEA HOUSE）は会場見取り図によれば森の島の左端にある橋を渡ったところにあったようだ。写真を後日送ってもらう手配をして美術館を後にした。帰国後にこの写真および日米で出版されているシカゴ万博関係資料を手がかりに鳳凰殿をめぐる真相を究明することになった。

2. 万国博覧会と日本美術

^{コンパス} 閣龍世界博覧会、通称シカゴ万博は1893年（明治26）5月1日から10月30日までの期間、アメリカ中西部イリノイ州シカゴ市郊外のミシガン湖畔で開催され、総計2,752万人の観客を集

めた。万国博覧会は1851年（嘉永4）のロンドン万博を始めとするが、ジョンソン編『シカゴ万博博覧会の歴史』によればシカゴ以前の開催は下記のとおりである。

第1回	1851年	ロンドン	第9回	1876年	フィラデルフィア
第2回	1853年	ニューヨーク	第10回	1878年	パリ
第3回	同年	ダブリン	第11回	1879年	シドニー
第4回	1854年	ミュンヘン	第12回	1880年	メルボルン
第5回	1855年	パリ	第13回	1888年	グラスゴー
第6回	1862年	ロンドン	第14回	1889年	パリ
第7回	1864年	パリ	第15回	1893年	シカゴ
第8回	1873年	ウィーン			(Johnson vol. I, 8)

シカゴ万博会場見取り図を見ると、独仏英などの西欧先進諸国に加えて、アメリカ合衆国各州、ベネズエラ、グアテマラなど南米各国、トルコ、ニュー・サウス・ウェールズ、アイルランド、セイロン、シャムなど世界の独立国39カ国および属国43カ国が参加、展示館を設けていることがわかる。科学技術の進歩による西洋先進文明を誇示するとともに、植民地を中心とした非西洋諸国の文化を展示することで先進諸国の植民地政策を正当化する一大見世物といえよう。

当初、コロンブスによるアメリカ大陸発見四百年を記念する万博の開催地として、ワシントンD.C. とセントルイスも名乗りを上げていたが、シカゴに決まったのは以下の理由によるという。

- ①合衆国の人口分布のほぼ中央にあたり、38本の鉄道が集結する交通至便の地であること
- ②アメリカ西部開拓の成果を内外に誇示するのに適した場所であること
- ③西部開拓の前線基地から百万都市へと成長したシカゴは新大陸発見記念に相応しいこと

大陸横断鉄道が開通して、アメリカは旅行ブームに沸いていた。ヨーロッパから見れば極東に位置する日本も、アメリカでは西部開拓の終着点カリフォルニア州から太平洋を渡ったところにあった。事実、フィラデルフィアおよびシカゴでの万博開催を経て、多くのアメリカ人が日本に向かうことになる。

日本と万博との関係は1862年（文久2）ロンドン万博に遡る。日米条約批准交渉のため1860年（万延元）に幕府が遣米使節を送ったのが開国後初めての海外使節であるが、その後駐日英仏公使の勧めにより、ヨーロッパの締盟六ヶ国（フランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガル）へも遣欧使節として、竹内下野守を派遣することになり、一行はこの年ロンドンで開催されていた万国博覧会を見学したのである。日本の正式出品はなかったものの、会場には初代駐日公使をつとめたラザフォード・オールコック（1809-1897）が日本で収集して持ち帰った美術品が展示されていた。遣欧使節団一行は博覧会場の賑わいに感嘆し、漆器、陶器、刀剣、紙類、その他の細工品など、他国に比べればわずかではあったがオールコックの日本美術工芸コレクションが総価格二十万両相当と聞かされて驚いている。また“museum”の訳語としての「博

物館」はメンバーの一人、市川渡が日記で用いたのが最初とされる。

日本が万博に出品するのは1867年（慶応3）のパリ万博からであり、幕府とともに薩摩・佐賀両藩も参加した。陳列された武具、装束、版画、陶磁器などの日本の美術工芸品は、それまで極東の一小国として認識されていた日本への関心を呼び起こし、ヨーロッパにおけるジャポニスムの端緒ともなった。日本政府としては1873年（明治6）ウィーン万博に参加したのが初めて、このとき日本語にはなかった“fine arts”の概念を表す言葉として「美術」が初めて使われたという。翌年（明治7）日本の工芸品を製造輸出する目的で起立^{きりゅうこうしやう}工商会社が設立され、富国強兵策の一環として輸出向工芸品の制作に力を入れることになった。1876年（明治9）にアメリカ建国の地フィラデルフィアで建国百年を祝う万博が開催された頃には、ジャポニスムの波はアメリカにも伝わり、日本への関心は高かった。フェノロサはフィラデルフィア万博で日本の陶磁器や木彫屏風、ブロンズ細工などに感銘を受けたとのちに書いている。日本の意匠はティファニーの銀器やアーツ・アンド・クラフツ運動の版画などアメリカの美術工芸品に取り入れられることとなる。だがジャポニスムの隆盛にも関わらず1878年（明治11）および1889年（明治22）開催のパリ万博では日本政府出品の掛け軸や屏風などは博覧会場の「美術館」には展示されず、「装飾品」「工芸品」などとして扱われたのである。

3. シカゴ万博参加と美術品の展示

シカゴ万博参加にあたり、政府は日本の産業と文化、とりわけ殖産の目的にかなう日本の美術工芸を海外に紹介する好機として、農商務大臣陸奥宗光を筆頭に万全の体制で臨んだ。1892年（明治24）に農商務省内に臨時博覧会事務局が設置され、経費として63万円が計上された。出品は貿易見本を中心とした「普通商品」、日本固有の美を表す「美術品」、美術を応用した実用品で将来の貿易に益する「美術工芸品」の三種に分かれる。同時に東京工業学校校長だった手島精一に委嘱して監督官（COMMISSIONER）としてアメリカに派遣し、シカゴ万博事務局に対して日本美術の出品にあたっては従来の区分を変更して、日本特有の木像、乾漆像、象牙像、水墨画などを美術の分類に入れること、同様に陶器、七宝、蒔絵、染色のうち絵画的要素の強いものをも工芸ではなく美術の分類に入れることを交渉し、ほぼ希望どおりに認められたのである。日本からシカゴ万博への出品は美術館のほか、工芸館、婦人館、園芸館、農業館、漁業館、運輸館など十一ヶ所に陳列されることになり、別途日本館を建設することが決まった。

博覧会場はシカゴ市南部のミシガン湖畔ジャクソン・パークの原野を切り開き、鉄道引込み線や栈橋を設けて建設された。会場北部にそびえる新古典派様式の建物が美術館（ART GALLERIES）である。狩野友信画「平治合戦」はここに他の日本美術作品とともに展示されたものと思われる。美術館内の日本展示スペースは当初一階ウェストコート内の一区画のみであったが、のちに中央ホール（ROTUNDA）周辺の一、二階に新たな区画が与えられた。中央ホール周辺の日本展示スペースを写した公式写真には壁に掛けられた絵画や台座に載った彫刻が雑然と並んでいる。

ジョンソンによれば日本の美術品出品は木彫、塑像、ブロンズ像、象牙、絵画、版画、七宝、陶磁器、漆器、金細工、建築模型など四百点余に上ったという。絵画では以下の作家と作品の印象が掲載されている。尾形月耕作「江戸山王祭礼ノ図」の色彩の鮮やかさと勢いのある筆遣い。谷口香喬作「醍醐観花ノ図」の生きいきした描写。歴史画としては巨勢小石作「聖徳太子講経ノ図」、池田慎次郎作「川中島合戦ノ図」。純粋に絵画として傑作であるとして岸竹堂作「虎ノ図」、数多く出品された風景画の中では鈴木華邨作「日光真景」六点。日本館を建設するにあたって、時代ごとの代表的な美術品をそれぞれに相応しいしつらえの部屋に展示することは、日本側として当然の希望であっただろう。

4. 日本館鳳凰殿

シカゴ万博の日本館は建設予定地がアメリカ館手前の島の上という位置にあり、高くない建物をというアメリカ側の要望もあって、宇治平等院鳳凰堂（阿弥陀堂）を模した純日本風の建物ということになった。「鳳凰殿」と名づけられた日本館の設計は開校後間もない東京美術学校に一任され、日本初の会社組織による土木建築会社として大倉喜八郎が明治20年（1887）に創立した日本土木会社が建設にあたることになった。日本土木会社はのちの大成建設であり、社史に万博の記録がある。

万博開催前年の1893年（明治25）9月には東京で鳳凰殿の建築材料を切組み、道具類とともに梱包してシカゴに発送した。工事監督として文部省の技師久留正道、日本土木会社からは主任技師織田仙吉、事務員高橋鉞橋、大工は棟梁の長谷川金太郎以下八名、石工一名、銅細工師二名、鳶人足五名と、総勢二五名が9月に横浜を出航、バンクーバー経由で渡米した。織田は京都出身で若い時に宇治平等院を実測した経験があったという。宮内省の招きで上京し、皇居の造営にあ



図5 「鳳凰殿正面全図」シカゴ美術館 アーノルド・コレクション蔵

たったが、当時は日本土木会社に入社していた。日本からやって来た職人たちの仕事ぶりは地元
の新聞を賑わし、会場で日ごとに姿をあらわす異国情緒豊かな純日本建築とともに、シカゴの人々
の関心と呼んだ。半年間雪に閉ざされる厳寒のシカゴであるが、雪どけとともに寒風の中で工事
を開始したのであろうか、地鎮祭の様子を伝える写真がある（Johnson vol.II, 423）。5月1日の
開会に間に合うように3月31日には落成式を行っている。完成した鳳凰殿の写真（図5）では、
アメリカ館側すなわち正面から見ると、ちょうど宇治平等院鳳凰堂が阿字池に影を落としている
ように、瀟湖に姿を映している。また鳳凰殿建設に際しては、皇室から5万ドル余が下賜された
という。

鳳凰殿建設に重要な役割を果たしたのが東京美術学校校長岡倉覚三（天心）である。天心は英
文案内書*THE HO-O-DEN (Phoenix Hall), An Illustrated Description of World's Columbian Exposition,*
Jackson Park, Chicago (1893) を執筆、出版している。天心によると鳳凰殿は寺院建築ではない
ものの、宇治の平等院鳳凰堂を模して、やや縮小し若干の変更を加えて建てられ、室内調度とし
ての日本美術品を紹介する展示スペースとしての役割を果たしている。左翼廊、右翼廊、中堂そ
れぞれ内装に藤原時代、足利時代、徳川時代の特徴を取り入れていることを説明し、調度、装飾
品についても作者の名前を挙げながら一点一点形状および機能を解説している。鳳凰殿中堂上段
の間（図6）については次のように記述している。（金子訳）

上段の間は二間ないし三間つづきの室の一番奥の一番高い区画で、貴人の座所に用い、
従者の待つ所より一段高くなっている。廊下は花鳥画などで飾ることが多い。

中央の室の壁画は、雌雄の鳳凰が雛を連れて遊ぶさまをえがき、東京美術学校の橋本
教授とその生徒の筆である。徳川将軍の平和な治世を象徴する。

小襖の花果の籠の図は、東京美術学校の狩野友信教授の筆。花は芸術の進歩を、果実
は豊かな稔りをあらわす。

牡丹図は橋本教授の筆。また入側（廊下）の梅樹図・芦に水禽図は川端教授とその生
徒の筆に成る。

襖と壁の絵は桐とつつじで夏の意匠とし、その他の花で秋を、雁鴨で冬と春をあらわ
した。

天井格間の雲に鳳凰の図は東京美術学校の生徒たちの手に成り、天井下部の花（鉄線
花）の図も同じである。皇室の御所の装飾にはつねに六弁の花を用いるが、これには古
代東洋の易法で六が水をあらわすところから防火の意味がある。

欄間、すなわち通風パネルは精細な鳳凰の彫刻で飾り、東京美術学校の高村光雲教授
の作である。（岡倉 16-17）

天心は季節に応じた意匠（万博開催は夏季）と取り合わせ、自然の光や風を取り込んだ建築様
式、東洋の易法の尊重など日本美術の特徴を説明し、そのための空間としての鳳凰殿を演出して



図6 「鳳凰殿中堂上段の間」岡倉天心全集2（平凡社）より



図7 「日本の職人たち」シカゴ美術館 アーノルド・コレクション蔵

いる。友信の描いた花果籠図の小襖は「壁画」という認識で、欄間のように独立した美術品として扱うのは難しいと判断されたのだろうか。あるいは火災の際に消火の水を浴びたか、焼失してしまったのかもしれない。どこかに残っているのではないかとの思いは捨てきれない。

手元にアーノルド・コレクションのモノクロ写真が一枚ある（図7）。完成したばかりの鳳凰殿のまわりで法被姿の日本人の職人二十一名が思い思いにポーズを取っている。日本土木会社の社

名と紋章入りの揃いの法被に股引と腹掛、頭には紋章入りの烏打帽を被り、足元は地下足袋のかわりに革靴で固め、誇らしげにカメラを見つめている。よく見ると懐中時計を胸に垂らしている者、ソフト帽を被った者などもある。厳寒のシカゴで働く大工たちは綿入れの法被を二枚も三枚も重ね、下からは格子柄のシャツがのぞいている。フロックコートにシルクハット姿の日本人の姿もみられ鳳凰殿落成記念写真のようである。

明治日本からアメリカに渡った職人たちの写真を見てみると、鳳凰殿はその建設の過程からして生きた美術品であり、日本文化の海外進出の象徴であったように思われる。多くの美術品は依頼主の要望によって生まれ、移動し、持ち主を変え、ときには姿を消す運命にある。鳳凰殿は五十年余の短い命であったが、シカゴの瀉湖に降り立った鳳凰のような束の間の美しい姿は、博覧会の来場者およびその後のジャクソン・パーク来訪者に感銘を与えただけでなく、建設に携わった多くの人の人生を変えたのかもしれない。

付記

狩野友信が関わったシカゴ万博についての調査にあたり、多くの方々のご教示と助言をいただいた。特に古田亮氏、ノーマ・フィールド氏、ハンス・トムセン氏、ジャンス・キャッツ氏、五十嵐暁郎氏には心から感謝申し上げます。

参考文献

- 岡倉覚三（1980）「鳳凰殿」（金子重隆訳）『岡倉天心全集 2』平凡社。〔原著：Okakura, Kakuzo. (1893). *THE HO-O-DEN (Phoenix Hall), An Illustrated Description of World's Columbian Exposition, Jackson Park, Chicago*].
- 尾佐竹猛（1929, 1989）『幕末遣外使節物語 — 夷狄の国へ』講談社学術文庫。
- 佐藤道信（1999）『明治国家と近代美術 — 美の政治学』吉川弘文館。
- 社史発刊準備委員会編（1963）『大成建設社史』大成建設株式会社。
- 東京国立文化財研究所編（1997）『明治期万国博覧会美術品出品目録』中央公論美術出版。
- 古田亮「閻龍世界博覧会独案内」（1997）『海を渡った明治の美術 — 再見！シカゴ・コロンプス世界博覧会』東京国立博物館。
- 山口静一（1982）『フェノロサ』三省堂。
- 山田久美子（1980）「狩野友信 — 明治を生きた最後の奥絵師（1） — 生い立ち・修行・奥絵師時代・作品」『LOTUS』19号 日本フェノロサ学会。
- （2000）「狩野友信の明治 — 奥絵師から日本画教師へ」『近代画説』9号 明治美術学会。
- （2002）「狩野友信 — 明治を生きた最後の奥絵師（2） — 来日外国人画家との交友」『LOTUS』22号 日本フェノロサ学会。
- （2008）「パリの欧文挿絵本」『ことばと人間』10号 立教大学言語人文紀要。
- Johnson, Rossiter ed. (1898) *A History of the World's Columbian Exposition Held in Chicago in 1893*. New York: Appleton.

Chicago Daily Tribune (1872–1963), Oct. 13, 1946. Pro Quest Historical Newspapers.

図版提供

- 図4 World's Columbian Exposition, Lagoon, looking northeast, Chicago, IL, 1891–1893. C.D. Arnold [photographer]. World's Columbian Exposition Photographs by C.D. Arnold, Ryerson and Burnham Archives, The Art Institute of Chicago. AIC Negative #E20797 ©The Art Institute of Chicago.
- 図5 World's Columbian Exposition, Ho-o-den, Chicago, IL, c.1893. C.D. Arnold [photographer]. World's Columbian Exposition Photographs by C.D. Arnold, Ryerson and Burnham Archives, The Art Institute of Chicago. Digital File #198902.080903-01.jpg ©The Art Institute of Chicago.
- 図7 World's Columbian Exposition, Japanese artisans, Chicago, IL, 1891–1893. C.D. Arnold [photographer]. World's Columbian Exposition Photographs by C.D. Arnold, Ryerson and Burnham Archives, The Art Institute of Chicago. Digital File #198902.03_069-107.jpg ©The Art Institute of Chicago.